



TITLE:

北魏の俸祿制施行について

AUTHOR(S):

古賀, 登

CITATION:

古賀, 登. 北魏の俸祿制施行について. 東洋史研究 1965, 24(2): 152-176

ISSUE DATE:

1965-09-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/152696>

RIGHT:

北魏の俸祿制施行について

まえがき

北魏は高祖孝文帝の太和八年(486)に到り、始めて百官の俸祿制を施行した。それよりまえ、北魏には俸祿制がなく、そのため官吏が著しく腐敗していたことは、清の趙翼が廿二史劄記一四「後魏の百官祿なし」で指摘している如くである。しかし、太和八年といえ、太祖が北魏を開國した登國元年(485)より數えて、實に九十八年目、世祖が北涼を亡ぼし、華北の統一を完成した太延五年(489)より數えても、四十五年目にあたる。とすると、建國以來一世紀もの長い間、俸祿制なしにすませて來たのはどういう理由によるのか、その間官人達はどうして暮して來たのか、更に、そうしてやって來ながら、太和八年に到り急に

古 賀 登

俸祿制を施行したのは、どういう事情の變化によるのか等等、種々考えなければならぬことがあるようである。

いうまでもなく、この俸祿制の施行は、それに續いて行われた均田制・三長制と深い繋がりをもっている。そしてこの均田制・三長制については、その施行年代の前後、施行の事情等をめぐって、議論が著しく紛糾している現状にある。⁽¹⁾ また後述の如く、俸祿制を施行したときの詔の中にも、「始めて俸祿を班ち、諸々の商人を罷む」とあるのに、そのあとに「預調を均しくして二匹の賦となし、即ち商用を兼ねしむ」とあって、意味のよくわからないところがある。このように材料も限られ、しかもそれらが種々矛盾を含んでいるような問題は、いろいろな視角から眺める必要があると考え、敢て小論を發表した次第である。大方

の御叱正を賜らば、幸甚である。

一 「始めて俸祿を班ち、諸々の商人を罷む」

魏書七上高祖紀上によると、太和八年六月丁卯詔し、始めて俸祿を班ち、そのため租調を増額し、同年九月戊戌詔し、十月より支給したとある。もともと、同書五八楊傳傳に、「太祖中山を平げてより(387)、多く軍府を置き、以って相威攝す。凡て八軍あり。軍各々配兵五千、祿を食する主帥各々四十六人」とあるから、太祖時でも特定の軍帥には俸祿を支給していたわけである。また同書二四張白澤傳によれば、顯祖のとき(460—71)、雍州刺史張白澤は、

官吏の汚職密告の新制に反對し、俸祿を支給し、官吏の生活を安定させるべきであると主張し、帝がこれを納めたとあり、次の高祖の延興二年(472)五月の詔には、「功に非ざれば以って爵を受くるなく、能に非ざれば以って祿を受くるなし。凡て外遷に出ずる者は、皆此れを引きて奏聞せよ」(同書一二三官氏志)という言葉がみえ、翌三年二月甲戌の詔には、「縣令にしてよく一縣の劫盜を靜する者は、二縣を兼治し、即ちその祿を食し、よく二縣を靜する

者は三縣を兼治し、三年にして遷して郡守となす。二千石にしてよく二郡を靜すれば、上して三郡に至ること亦かくの如し。三年にして遷して刺史となす」(同書高祖紀上)とあるから、高祖の初めには、地方官に俸祿が支給されていたようである。ただし同紀所載の太和八年六月丁卯の班祿の詔に、「故に舊典を憲章し、始めて俸祿を班ち」とある故、俸祿が制度化されていなかったことは疑いない。そこでまず、その事情を考えるため、根本史料である太和八年の詔をみてみよう。それによると、

官を置き祿を班つは、これを行うこと尙し。周禮食祿の典あり、二漢受俸の秩を著す。魏晉に逮ぶも往憲を事稽し、以って經綸治道せざるなし。中原喪亂してより茲の制中絶す。先朝因循にして未だ釐改に違あらず。朕永く四方に鑒み、民の瘼を求め、夙興昧旦、憂勤に至る。故に舊典を憲章し、始めて俸祿を班ち、諸々の商人を罷め、以って民事を簡にす。戸ごとに調三四・穀二斛九斗を増し、以って官司の祿となし、預調を均しくして二匹の賦となし、即ち商用を兼ねしむ。一時の煩ありと雖も、終に永逸の益を克くせん。祿行われての後、贓一匹に滿つ

る者は死す。

とあり、北魏に俸祿制がなかったのは、中原が喪亂したためだとある。

たしかに、五胡侵入以來、十六國（實は十八國）がつぎつぎと立ち亡び、中原はその戦場となって荒廢の極に達した。だから財政窮乏し、俸祿を支給したくとも出来なかったというのなら、事情やむを得なかったかも知れないが、

いかに喪亂のためとはいえ、制度そのものを置かなかつたというのは、おかしいのではあるまいか。晉書一〇三劉曜載記をみると「（光初五年）（322）（劉）曜始めて無官の者に禁じ、馬に乗ることを聽さず。祿八百石已上の婦女は、乃ち錦繡を衣ることを得」とある。この祿八百石とは、例えば二千石太守というような慣例的用法ではなく、實際の祿高に應じた階位を言っているもので、これによると趙には俸祿制があつたとみられる。また同書一一三苻堅載記上によれば、苻堅は、境内が旱災にあつたため、百僚の秩を次を以って降したとある故、前秦にも俸祿制があつたわけだし、また同書一二七慕容徳載記には、慕容徳が長安にいる母兄の安否を尋ねるため、平原の人杜弘を遣わそう

としたとき、弘が「臣の父雄、年六十を踰え、未だ榮貴に沾さず。本縣の祿を乞い、以つて烏鳥の情を申さん」と乞うたので、平原令を授けたという話のついている。これによると南燕でも明らかに俸祿を支給している。かく既に、十六國中俸祿を支給しているところがあるのをみると、北魏が中原喪亂のため俸祿制を行わなかったという理由は、成立たないであろう。

もっとも、南北朝時代は、豪族が官界を獨占した時代である。だから郷里に尨大な資産を持つ官人には、些々たる俸祿など、實際には必要なかつたであろう。そのことは特に漢人官僚の場合、言えるかも知れない。永興五年（425）二月、太宗が漢人官僚を採用したときも、豪門疆族・先賢の世胄をとっており（魏書三太宗紀）、世祖の神嘉四年（426）九月壬申には、特に范陽の盧玄・博陵の崔綽・趙郡の李靈・河間の邢穎・勃海の高允・廣平の游雅・太原の張偉等に詔し、州郡の名族數百人を敍用している（同書四上世祖紀上）。彼等は何れも地方において廣大な莊園を持ち、一族が歷代王朝の要官を占めて來た世族門閥であつた。一方外來の鮮卑人官僚にしても、國初以來の果敢な征

服戰爭で獲得された尨大な奴婢・牛羊・馬匹・財寶及び田宅の賜與をうけ、急速に地主化して行つた。このことは、河地重造氏が「北魏王朝の成立とその性格について——徙民政策の展開から均田制へ——」で詳しい表を作られているから、それを参照されたい。特に彼等は、天賜元年(469)の宗主督護制の施行により、次第に宗族・鄉黨を支配し、更に漢人流民をかかえこむことによつて、土豪化して行つたのである。⁽⁴⁾ 彼等にとつて、このような國家權力との結びつきが、單に賜與を得るといふだけでなく、地域社會の支配に多大な利益があつたことは、勿論である。そのようなわけで、實際には俸祿がなくとも、それだけで充分であつたかもしれないが、豪族の大土地所有にしても、のちの均田制下の隋唐の官人永業田の如く、官階に對應したものは何もなく、また奴婢・田宅の賜與にしても、一時的・恣意的であり、それ故に俸祿を支給する必要がなかつたとは言えないし、いわんや建國百年後まで俸祿制を施行しなかつた理由にはならないであらう。

そこで、いま一度太和八年の詔に戻つてみると、同詔に「故に舊典を憲章し、始めて俸祿を班ち、諸々の商人を罷

め、以つて民事を簡にす」とあり、俸祿を支給するのは、商人をやめ、民事を簡にするためとあるから、これを手掛りとして考えなければなるまい。

俸祿制施行以前、北魏の官僚が商人と結託し、その上前をはね、いかに腐敗していたかについては、既に趙翼が指摘している如くである。すなわち彼は「後魏に未だ俸祿がなかつた頃、清廉な者は異常な貧に苦しみ、例えば高允の如く、數間の草屋に住み、ボロをまとい、鹽と野菜で暮していた状態であつたが、一般官吏は商人と結託してその利を抽分し、甚だしきは崔寬の如く、盜魁と交結し、その上前をはねていた。文成帝は詔し、官吏の高利貸を禁じたが、上下がかくの如きであるから、どうして國を治めることが出來よう」といつている。特に高宗朝になると、地方官が高利貸化し、その弊害が著しかったようである。魏書一一〇食貨志には、

高宗の時、牧守の官頗る貸利をなす。太安初め(456)、使者二十餘輩を遣わし、天下を循行し、風俗を觀、民の疾苦する所を視しむ。

とあり、さきに趙翼が引いた和平二年(461)正月乙酉の

詔には、

刺史は民を牧し萬里の表たるに、頃ごろより發調に因る毎に、民に假貸を逼る。大商富賈は時利を射ることを要め、旬日の間、十倍を増贏す。上下通同し、分ちて以つて屋を潤おす。故に編戸の家、凍餒に困しみ、豪富の門、日々業績あり。爲政の弊、此れに過ぐるなし。其れ一切禁絶し、犯す者十足以上は皆死す。天下に布告し、威禁を知らしめよ。(同書五高宗紀)

とある。恐らく彼等は、州倉の官物を流用し、これを高利に貸付けていたのであらう。同書食貨志によれば、顯宗皇興の時(476-70)、民の貧富によって租輸三等九品の制を作り、千里の内は粟^{もも}を納め、千里の外は米を納め、上三品戸は京師に入れ、中三品戸は他州の要倉に入れ、下三品は本州に入れしめた。中三品と下三品といえ、民の大半である。だから當時、地方の倉庫には尨大な租粟が貯えられていたわけであり、これを播種期や徵稅期に貸出せば、忽ち數倍の利を得ることは可能である。ただし右の禁令からみて、これは官公廳が合法的に行う出舉とは異り、地方官の官物流用とみるべきであらう。

けれども、先の太和八年の詔にある俸祿を班つことによつて罷めた「諸々の商人」とは、ただ單に汚官貪吏が私腹を肥すために結託していた商人を指しているのではない。八年に到り、始めて罷めたということは、それ以前には合法的に置かれていたことを意味し、従つてこの商人とは、官人に對し、公式乃至半公式に管理・使役を認めていた特殊な商人とみるべきであらう。北魏は、このようにして官吏の商賣を認める代りに、俸祿を支給しなかつたわけである。

それなら、そのような商人とは何であつたかといふと、太和元年八月丙子の詔に、

工商皂隸各々厥の分あり。而して有司縱濫、或は清流を染す。今より戸内工役する者有らば、本部に推上し、丞已下次に準じて授く。若し階元勲に藉し、定國に勞するを以つてする者は、此の制に従わず。(魏書高祖紀上)とあり、官階により工業奴隸が與えられているのを見ると、官人に使役を認めた商業奴隸であらう。當時貴顯官僚が行つていた商業活動のうち、最も顯著な例は、世祖の太子拓跋晃のそれである。魏書四八高允傳によると、田園を營

立して其の利をとり、鶏犬を畜養し、酤を市鄣に販したという。勃海の名族であり、深く公羊學を治め、後世廉吏の範として趙翼にまで引用された高允には、これ許りは我慢が出来なかつたらしく、民と利を争うのは天子の道でないと諫めたが、聞きいれられなかった。太子晃のことは、餘程有名であつたらしく、南齊書五七魏虜傳は、

僞太子の宮は城東にあり。……婢使千餘人。綾錦を織り、酤酒を販賣し、猪羊を養い、牛馬を牧し、菜を種し利を逐う。

と傳えている。貴族主義のようなく爛熟した南齊の士人にとっては、高貴の身で商賣する北魏の有様が餘程奇異に感じたのであらう。ついでに、先に趙翼が汚官の代表としてあげた崔寔についてみると、魏書二四同傳に、

(世祖の時) 陝城鎮西將を拜す。……時に官祿力なし。

唯だ給を民にとる。寛善く撫納し、禮遣を招致す。大いに受取あるも、而もこれに與うる者恨むなし。また弘農は漆蠟竹木の饒を出す。路南に通じ、販買來往す。家産豊富にして、而も百姓これを樂しむ。諸鎮中號して能政となす。

とある。彼が家産を致したというこの商賣は、既に志田不動曆氏が指摘された如く、漢水より南朝襄陽に通じる貿易であり、その漆蠟竹木等の商品は、河南の西部・湖北方面の物産である。⁽⁹⁾ だから彼は、百姓相手の小商賣をしていた者でなく、國と民とを富ます貿易の推進者であり、それ故に能吏とされたのである。

もっとも、班祿後、かかる貴顯官僚の商賣が止つたわけではない。例えば魏書二一上咸陽王禧傳に「禧性儻奢、財色に貪淫。……是により貨賄を昧求す。奴婢千數、田業鹽鐵遠近に徧ねく、臣吏僮隸相繼いで經營す。世宗頗るこれを惡む」とあり、同書同卷北海王詳傳には「景明の初め(500)、復た季父崇の寵を以つて位望兼極め、百寮これを憚る。而して貪冒厭く無く、取納する所多し。公私の營販、遠近を侵剝す」とある等、史書はむしろより多くその事實を傳えている。しかし班祿後は、例えば「世宗これを惡む」とあるように、その時においても非難をうけ、また史書は、多分に批判的口調をもつて語っているのかかわらず、班祿以前にあつては、少數漢人廉吏を除いては、特にこれを非難する者もなく、むしろ官吏の商賣が當然のこ

とと見做されていたことは、問題ではあるまいか。たしかに、官吏の收賂・横領等の不正行爲は、國初より嚴しく取締られており、また高宗以後は、特に官吏の高利貸を禁じる政策に變つて來てはいる。しかし當時にあつては、「産業を營まざる」官吏は、むしろ希有な例として特筆される程であり、官吏の商賣が公然と行われていたのであつて、このことは商業を賤業とし、民と利を爭わざることをもつて官吏の務めとした中國古來の考えとは、全く逆であつた。このように中國的な物の見方からすれば考えられないのかかわらず、ひとり北魏にあつては、種々の問題をかもしながらも、それを正規に認め、その利をもつて俸祿に代えさせていたというのは、やはり北魏獨特の國家的性格によるものとみる以外に、考えられないであらう。

二 貿易の獨占化と商人身分の低下

鮮卑拓跋族が平城に遷都する以前、彼等は盛樂（内蒙古和林格爾附近）を中心として、廣く内蒙で遊牧生活を営んでいた。魏書一三平文皇后王氏傳によれば、昭成什翼健（在位338—76?）のはじめ、灑源川（桑乾河上流）に都

を定め、城郭を築き、宮室を起そうとしたとき、母王氏が「國は上世より遷徙して業を爲す。今事難の後、基業未だ固らず。若し城郭して居し、一旦寇來らば、卒に遷動し難し」と反對したため、止めたという。また同書二四燕鳳傳によれば、什翼健の命により前秦の苻堅に使した燕鳳は、堅がその人馬の多少を問うたのに對し、「控弦の士數十萬、馬百萬匹」と答え、堅がそれを虛辭と疑つたのに對し、「雲中の川は、東の山より西の河に至る二百里。北の山より南の山に至る百有餘里。每歲孟秋、馬常に大集し、略々滿川をなす。此れを以つてこれを推せば、人の言をして猶ほまさに未だ盡さざるべし」と答えたという。勿論これらの話をそのまま受けとるわけには行かないが、太祖以前は、主として遊牧生活を営んでいたとみられる。

この拓跋族が、前秦滅後一はやく強力となり得たのは、勿論太祖の力量やその他種々な條件によるが、その位置が交通上極めて恵まれていたためである。いま地圖の上でみると、盛樂は漠北より洛陽に至る北方路上の要衝であり、また北京と長安を結ぶ漠南の幹線もここを通り、東西交通路の十字路にあたっていた。いうまでもなく、遊牧民は

商業ぬきには發展し得ない¹⁶。この遊牧民の商業性は、遊牧經濟の單元性・不安定性及び移動性による先天的なものであり、拓跋鮮卑も、この絶好の位地を占めることにより、中繼貿易で發展したのであった。彼等が諸部族を統合し、はじめて盛樂に根據したのは、三國魏末始祖力微の時であるが、その頃のことにつき、魏書一序紀は、

聘問交市往來絶えず。魏人金帛綰絮を奉遺すること、歲に萬計を以てす。

と傳えており、活潑な交易を行っていた。

その後、力微の部族連合は、晉將衛瓘の巧妙な離間策にあつて分裂し、力微の死後國內紛擾したが、晉の惠帝元康四年(284)、祿官昭帝が立つに及び、その領域を三分し、祿官は上谷の北・濡源の西(宣化乃至張家口附近か)に本據を置き、東部すなわち今の熱河省西南部から河北省西北部を治め、その甥の猗㐁桓帝が代郡參合陁(山西省陽高縣)を中心とする一帯を、猗㐁の弟猗盧穆帝が盛樂を本據に、それぞれの地域を統領した。その後、猗㐁・祿官相繼いで死し、猗盧が再び諸部を統合し、その猗盧は、匈奴防衛の功により永嘉四年(310)晉懷帝より代公に封ぜられ

たが、その死後また國內擾亂し、前記昭成帝什翼犍が立ち、これを統合した。しかしこの什翼犍は前秦苻堅に破られ、また諸部離散し、苻堅は平城に烏丸府を設け、代國を黃河によって東西に分け、その東部大人に劉庫仁を、西部大人に劉衛辰を任じ、そして什翼犍死後母と共に賀蘭部に避難していた拓跋珪が、のちこの劉庫仁のもとに歸し、これが苻堅の失墜と共に立つて、北魏を興したのである¹⁷。この力微・猗盧・什翼犍死後の諸部離散といい、祿官の三分統治といい、拓跋部族連合が極めて緩い繋がりがりしかなかったことを示す。

一體、遊牧部族連合というものは、匈奴の例をみても、定期集會及び非常事態に際し連合して行動をおこす場合を除き、平生各部族は、それぞれ獨自に遊牧を営んでいた。その定期集會は、匈奴の場合をみると、史記一一〇匈奴傳に「歳の正月、諸長は單于の庭祠に小會し、五月龍城に大會し、其の先・天地・鬼神を祭り、秋馬肥えて蹕林に大會し、人畜の計を課校す」とあり、蹕林の大會につき集解所收の漢書音義は、「匈奴の秋社は、八月中皆祭處に會す」といっている。前述の如く昭成帝は、その建國二年、灑源

川に建都することを議したが、魏書序紀はその時のことを
夏五月、諸々大人を參合陂に朝し、議して都を灋源川に
定めんと欲す。

と記している。この參合陂の會合は、匈奴の五月の薊城の
大會に相當する定期集會で、このとき定都の議が出された
のであらう。また同紀昭成帝建國五年の條に、

夏五月、參合陂に幸す。秋七月七日、諸部集を畢う。壇
埒を設け、講武馳射す。因りて以つて常となす。

とある。七月七日の集會は、匈奴の秋社に相當する。従つ
て平時は、隊商も各部ごとに或は數部連合して出していた
のであり、廣い境上における塞上貿易は、これら諸部の活
躍により、不斷に行われていたのである。

ところで、この塞上貿易は、いうまでもなく鮮卑が馬を
賣り、中國より絹をかう形で行われた。この形は、太祖の
中山平定まで續いていたことに注意されたい。すなわち資
治通鑑一〇七晉紀二九武帝太元十六年(391)七月の條に
よると、北魏と後燕との戰鬭の動機は、北魏が後燕に馬の
輸出を拒否したためであつたという。だから鮮卑にとつ
て、絹は甚だ貴重な輸入品であつた。魏書序紀昭成帝三十

九年の條に、

帝雅性寬厚、智勇仁恕なり。時に國中綰帛少し。代人許
謙絹二匹を盜む。守者以つて告ぐるも、帝これを匿す。

燕鳳に謂いて曰く、「吾れ謙の面を視るに忍びず。卿言
を泄すこと勿れ。謙或は慙じて自殺せん。財のために士
を辱しむるは非なり」と。

という話がある。盛樂時代は絹が少く、非常に高價であつ
たことがわからう。それ故彼等は、中國商人を厚遇して招
き、それに應じ、大金をもつて塞上に來り活躍した中國商
人も多かつた。水經注三河水の條に、

皇魏桓帝十一年(266)、西して榆中に幸し、東して代地
に行く。洛陽の大賈金貨を賣え、帝の後に隨つて行く。

とあり、魏書二三慕容傳には、

慕容含は鴈門繁時の人なり。家は世々貨殖し、貲累巨萬。

劉琨并州となり、含を從事に辟す。含は近塞の下に居
し、常に國中を往來す。穆帝其の才器を愛し、善くこれ
を待せり。

とある。また同書二太祖紀によると、太祖即位の九年(386)
すなわち登國元年の前年、劉庫仁の子顯が、庫仁のあ

とを繼ぎ東部大人となった叔父眷を殺してこれに代り、將に謀叛を起そうとしたとき、商人の王霸なる者がこれを感じし、帝の足を衆中で履んで知らせ、帝はこれにより逃れることが出来たとある。これらによってみると、商人が皇帝の側近にあつて、極めて重要な役割りを演じていたことが認められよう。また翌年十月、昭成の子窟咄が劉顯に擁されて侵寇してきた時、太祖のため外戚後燕國王慕容垂に援軍依頼に使した安同なる者は、同書三〇安同傳によると、もと劉庫仁の妻兄公孫眷に隨つて商販していた商胡であり、のち太祖に認められ、留まつて奉侍していた者であるが、同書一五窟咄傳によると、垂に使しての歸路、窟咄の兄子意烈に押されたとき、商賈の囊中に匿れて免れるを得たという。これによってみると、かかる戦鬪のさ中にあるても、塞上貿易が盛んに行われており、またそれを擔つていた商人の地位が、王廷中にあつて、極めて高かつたことが、明らかであろう。

さて太祖は、同年慕容垂の援軍を得て窟咄・劉顯を破り、その部衆を收めて代國を統一、ここに代に都して國を開いたのである。魏書官氏志によれば、この年太祖は、諸部

落を散じ、編民と同じくしたとあるが、同書八三上賀訥傳によれば、「(賀)訥太祖に従い中原を平げ、安遠將軍を拜す。其の後諸部を離散し、土を分つて居を定め、遷徙を聽さず。其の君長大人皆編戸と同じ」とあるから、實際に分土定居が行われたのは、中原平定の皇始二年(386)以降のことであろう。それなら、これより諸部は遊牧をやめ、農耕牧畜へと移つて行つたかという、必ずしもそうとは言いえない。太宗の神瑞二年(431)秋、穀みのらざるを以つて、都を鄴に遷そうとしたとき、それに反對した崔浩が、

今國家都を鄴に遷せば、今年の飢は救うべくも、長久の策に非ざるなり。東州の人常に國家は廣漠の地に居すと謂う。民の畜養なく、號して牛毛の衆と稱す。今舊都を留守し、家を分つて南徙せば、恐らくは諸州の地に滿たず。郡縣に參居し、榛林の間に處し、水土便ならず、疾疫死傷せん。情見え事露れば、百姓の意沮し、四方これを聞かば、輕侮の意有らん。(赫連)屈丐・蠕蠕必ず挈を提して來り、雲中・平城は則ち危殆の慮あらん。恒代千里の險に阻隔せられ、救援せんと欲するも、これに

赴くこと甚だ難し。此の如くんば聲實俱に損ず。今北方に居り、假りに山東をして變あらしむるも、輕騎南出し、威を桑梓の中に耀かせば、誰か多少を知らん。百姓これを見、塵を望みて震服せん。此れは是れ國家諸夏を威制するの長策なり。春に至りて草生せば、乳酪將に出づべし。兼ねて菜果あらば、來秋に接するに足る。若し中熟を得ば、事則ち濟らん。(同書三五崔浩傳)

といっているのを見られたい。外來の魏人は、依然遊牧生活を行い、漢人農耕民とはかなり違つた社會を組織していたのである。分土定居とは、戸籍を造り、かつ遊牧の範圍を限つたことであらう。一體遊牧といつても、水草を逐い無制限に移動するものではない。因みに、羊の一日の行動半徑は六料であるから、理論的には半徑六料の圓形牧地が必要であり、その草を食べ盡すと、十二料づつ移動することになるが、今西錦司氏の調査によれば、内蒙古でも移動をしているのはチャハル北部渾善達克砂丘地帯以北であり、それも二料・三料と動くのはまだよい方で、秋營地と冬營地が百米ぐらいしか離れていなかったり、極端なものになると、夏營地と冬營地の距離が三十米というようなもの

のさえあるという。⁽⁸⁾ 晉北は蒙古草原地帯と異り、水草とも遙かに豊かであるから、固定生活でも放牧は可能である。⁽⁹⁾

先の崔浩の言葉によつて明らかな如く、鮮卑がかく雲代に居住し、内長城を越えて中原に入つて來なかつたのは、一つには、彼等が依然遊牧を行つていたからであり、一つには、少數征服者として漢族を支配し、かつ塞外民の侵入を防ぐため、遊牧騎馬民族としての組織を崩したくなかつたという軍事的理由からであつた。恐らく彼等が土着をはじめたのは、太宗頃からであり、本格的には世祖の華北統一後ではあるまいか。南齊書魏虜傳は「什翼珪始めて平城に都するも、猶ほ水草を逐い、城郭なし、木末始めて土著居處す。佛狸梁州黃龍を破り、其の居民を徙して大いに郭邑を築く」と言っているが、種々な情勢から判斷して、事實に近いと思う。

また、その頃の國家財政のあり方を見ると、軍費は主として舊遊牧民時代のように、周邊諸部族に對する略奪戰爭で賄つていた。魏書太祖紀によると、太祖は登國六年十二月、劉衛辰を破り、名馬三十餘萬・牛羊四百萬を獲、天興二年(399)二月丁亥、高車雜種三十餘部を討ち、生口七

萬・馬三十餘萬・牛羊百四十萬を略取した。その他大小の戦鬪で奪った生口・牛羊・馬匹は枚舉にいとまがない。また世祖が公卿に議し、赫連夏國と蠕蠕と何れを先に討つべきかを問うたとき、長孫嵩・長孫翰・奚斤等が「赫連は土に居し、未だ患をなす能わず。蠕蠕は世々邊害をなす。宜しく先に大檀を討つべし。及ばば則ち其の畜産を收め、以つて國を富ますに足らん。及ばざれば則ち陰山に校獵し、多く禽獸を殺せば、皮肉筋角はもつて軍實を充さん。亦一國を破るよりは愈^{まさ}らん」(同書二五長孫嵩傳)と言っているのを見られたい。同書一〇三高車傳によると、世祖は蠕蠕を討ち、歸路漠南に到り、已尼陂に高車東部の人畜が多數あるのを聞き、これを追ひ、その數十萬落を降し、馬牛羊百萬を獲、その部落を漠南千里の地に移し、歲ごとに獻貢せしめ、これより馬牛羊は賤をいたし、氈皮は積むに委すに到つたという。この高車襲撃の如きは、何の名分もなく、漢人の司徒長孫翰・尙書令劉潔等は極力反對したが、世祖はきかなかつた。正にそのやり方は、舊游牧民時代の略奪戦争と何の變りもないではないか。

とすれば、彼等が、游牧經濟に不可欠な商業を正業視す

る見方は、從來と全く變つていなかったであらう。北魏の貴顯官僚に商工皂隸が賜與され、彼等がそれによつて盛んに商業活動をしていたのは、彼等本來の考え方からすれば、何ら非難さるべきことではなかつたのである。商業を賤しみ、官吏の商賣を非とする漢人的考え方とは全く逆であつたのであり、生活のプリンシプルが違つていたのであつた。

しかしながら、平城定都以後、北魏の性格は徐々にではあるが、根本的に變化しつつあつた。特に後燕を討ち、中山を平げて以後、優れた中國文化に接した太祖は、強力に中國化政策をおし進めた。魏書太祖紀によれば、まず中山を平げた翌年、天興元年正月、農業開發のため、山東六州の民吏・徒何・高麗の雜夷三十六萬・百工伎巧十萬餘口を京師に移し、二月計口受田して強制勞働に附し、つづいて同年十二月、六州二十二郡の守宰・豪傑・吏民二千家を代都に徙した。このような徙民は、その後もたえず行われ、北魏の一般財政は、主としてそれらからの稅收を基礎に運営されたのである。同書同紀によれば、天興三年二月丁亥、始めて籍田し、同書食貨志によれば、太宗神瑞二年、京畿不

熟をもつて飢民の山東に就食することを許し、また有司に勅し、農桑を勸課し、これより歳數々豐饒し、畜牧滋息したとある。かくして勸農策は着々成果をあげて行つたのである。

また統治機構も、かつての部族連合組織から、中國的官僚制へと急速に變化をとげた。魏書官氏志によれば、皇始元年始めて曹省を建て、百官を備置し、五等爵を制し、外職には刺史・太守・令長以下を隨時に置いた。その後官制はますます整い、天賜元年八月には、初めて古の六卿に準じて六調官を置き、その屬官を配し、その秩を定め、同年九月には五等爵を四等として王公以下を封爵、その十一月には、宗室・八國・州郡に各々師を立て、宗黨を辨じて人才を擧げしめた。これが先述の宗主督護の制であり、同書太祖紀によれば、この時才ある者は官に任じ、諸部の子孫で業を失つた者には爵を授けたが、この時賜爵された者二千餘人に及んだという。

このようないろいろな變化のうち、特に注目しなければならぬのは、貿易形態の變化である。貿易は遊牧と並んで、遊牧民の生活を支える最も重要な經濟活動の一つであ

るが、太祖の分土定居以來、急速にその形を變えて行つた。というのは、先述の如く、以前盛樂にいた頃は、塞上において馬を賣り、中國より絹を買っていたが、平城定都以後、特に皇始二年中山を平げた後は、絹の輸出國として立場を變えて行つたのである。すなわち中山を得ると、翌天興元年百巧伎工十萬餘口を平城に徙す等、その優れた中國文化の移植に全力をあげたのである。魏書九四仇洛濟傳に、

魏初、禁網疏闊、民戸隱匿し、漏脫する者多し。東州既に平ぎ、綾羅戸の民、發を樂しむ。是に因りて請うて漏戸を採り、供して綸錦を爲らしむ。自後逃戸、占して細繭羅縠となる者一つならず。是に於いて雜營戸帥天下に通ねし。守宰に屬さず、發賦輕易、民多く私附す。戸口錯亂し、檢括すべからず。

とある。かつて塞上にいた時、専ら中國の絹を入手するため汲々としていた彼等が、今度はその生産を獨占するに至つたのである。このとき絹戸の賦が農民にとって輕易であつたというのは、鮮卑人が絹を非常に高價なものと思つていたからであり、そして發賦輕易なるが故に、雜營戸帥が

天下に溢れたというのは、彼等の漢人對策のユーモラスは失敗ではあるまいか。しかしともかく彼等は、かくしてその網をもって貿易開發にのり出したのである。世祖は、神䴥四年、崔浩の意見に従い、赫連夏國を討ち、これを滅ぼした。その理由は種々考えられるが、代都乃至盛樂より、オルドスをつきり、長安―河西に通じる交易路を開くためと見ることが出来る。崔浩という人は、漢人でありながらよく遊牧民の性格を知り、さきには鄴への遷都を止めたが、また同時に、漢人經世家として優れた見識を持ち、西域貿易の利を深く察していたのであり、後述の如く、河西經路を積極的に推進したのは、彼であった。太延三年(473)、世祖は董琬・高明を西域に派遣した。彼等は鄯善よりターリム盆地の諸國をまわり、琬は烏孫より破洛那をおとずれ、明は者舌を尋ね、これにより西域への道が通じた。⁶⁰しかしそれには、北涼の存在が邪魔である。崔浩は沮渠牧健を討つべきことを熱心に獻策、朝臣達の反對を押切つて世祖を遠征にふみきらせた。同書九九沮渠牧健傳によると、その派兵の理由の一つとして、牧健が「朝廷の志、遠きを懷うに在るを知り、固く聖略に違ひ、切に商胡に税

し、以って行路を斷つた」ことをあげている。もつてその意圖が、西方貿易ルートの制壓にあったことがわかるであろう。太延五年北涼を倒滅。これより鄯善・焉耆をはじめ、烏孫・破洛那等西域十六國が、北魏に來貢するに至つた(同書一〇三西域傳)。かく、太祖―世祖朝を経る間、北魏の貿易形態は、かつての塞上貿易から、京師での朝貢貿易へと變つて行つたのである。

このような政府の農本主義政策及び朝貢貿易による通商の獨占化は、當然の結果として、かつての鮮卑人の生活を支えていた社會原理を、根底から變えて行つた。すなわち遊牧生活の否定と塞上貿易の禁止である。遊牧への制限は、太祖の分土定居以來徐々に進められて行つたが、魏書高祖紀上によれば、遂に高祖の延興五年四月には、詔して鴈鵠を畜することを禁じ、六月庚午には、牛馬を殺すことを禁ずるにまで發展した。一方貿易の獨占化に伴い、それと相争の關係にある塞上貿易を禁じようとするのは當然であるが、これは商工業者への壓迫となつて現われた。世祖は太平眞君五年(475)正月戊申詔し、

王公より已下庶民に至るまで、私に沙門・師巫及び金銀

工巧の人を養い、其の家に在る者は、皆遣わして官曹に詣で、容匿するを得ず。今年二月十五日を限り、期を過ぎて出でざれば、師巫・沙門は身死し、主人は門誅す。

(同書四下世祖紀下)

とし、同月庚戌また詔し、王公以下卿士の子は、皆太學に詣でさせ、并せて百工・伎巧・驍卒の子息は、皆父兄の業を習わしめ、私に學校を建ててを禁じ、違えば師は死罪、主人は門誅することとした(同書同卷)。このように、工巧の人と沙門・師巫の私養を同時に禁じたのは、當時富豪が私奴婢を剃髪し、佛教保護に名をかりて自己の財産を匿す者が多かったためであるが、一つには、藤間生大氏が指摘された如く、佛教そのものが商工業を重視し、自らも寺院建立等を中心に商工活動を行い、またそれによって商工階級の支持を受けており、それが農本主義政策を行おうとする世祖の立場と、するどく對立したからである。そのことは、太平眞君七年三月の有名な世祖の廢佛棄釋のとき、諸州の沙門を坑し、佛像を毀し、それと并せて長安の工巧二千家を京師に徙していることによって、明らかであろう(同書同卷)。この排佛の直接の動機は、沮渠氏滅亡

のあと胡盧水(甘肅省固原縣蔚茹水)の羯胡蓋呂の大反亂があつた時、長安の寺院が胡盧水蕃を匿まつたためということであるが(同書一一四釋老志)、これは、西域貿易權を中央に回收しようとする世祖と、それを拒む河西の諸蕃及びそれと結びあつた佛寺との衝突であり、そのことは、この策が、北涼遠征を世祖にすすめた崔浩の發議によるものであつたのをみれば、容易に肯首されるであらう。農本主義政策はその後ますます厳しく、正平二年(451)には詔し、本を棄て沽販する者を禁じた(同書四下恭宗紀)。その後佛教への壓迫は解かれたが、商工階級への壓迫はいよいよ厳しく、高宗和平四年十二月壬寅詔し、皇族・師傅・王公侯伯及び士民の家の百工・伎巧・卑姓と婚をなすことを禁じ、犯す者は罪を加え(同書高宗紀)、高祖は延興二年四月庚子詔し、工商雜伎は農に赴くことを許す一方(同書高祖紀上)、太和元年八月丙子には、前記の如く「商工皂隸各々厥の分あり。而して有司縱濫、或は清流を染す。今より戸内工役する者あらば、本部に推上し、丞已下次に準じて授く。云々」と詔し、四民の身分秩序を厳しくしたのである。

さて、このようにみると、かつて蒙古の草原に遊牧し、

塞上で自由に隊商活動をしていた鮮卑遊牧民が、どのようになつて行つたかは、自ら明らかであろう。鮮卑社會ははげしい階級分化の波に襲われ、次第に生活の場を失う者が續出した。天賜元年の授官・賜爵・宗主制の制定は、分土定居以後のかかる矛盾に對してとられた措置であるが、ここに官爵を受けた者達は、寄生官僚化の一途を辿つた。そして、朝貢貿易の盛行に伴う首都や宿場都市の繁榮につれ、官僚生活はますます奢侈に流れ、そこで彼等は、その特權を利用して寄生高利貸化して行つた。先述の魏書食貨志の記事に「高宗の時、牧守の官頗る貸利をなす」とか、和平二年の詔に「刺史は民を牧し、萬里の表たるに、頃ごろより發調に因る毎に、民に假貸を逼る。云々」とあるのは、その間の狀況を言つたのであらう。かくして小民は、これら汚官のふみにじる所となり、日々その誅求に晒された。魏書本紀によると、西域貿易が次第に進行する高宗頃より農民反亂が始まり、次の顯宗朝・高祖朝の初めになると、各地で反亂が殆んど連年起された。そこで政府は、かかる小民を解放し、官吏の誅求を止めるために、俸祿を制

定せざるを得なかつたのである。

太和八年の詔に、「始めて俸祿を班ち、諸々の商人を罷め、以つて民事を簡にす」とあるのは、貿易の獨占化に伴い塞上貿易を禁じられた鮮卑官人が、次第に商業高利貸化し、小民を壓迫したためとられた措置で、これは北魏が中國王朝化し、農本抑商策に變つたための、當然の歸結であつた。

三 官祿の資及び預調の賦と「兼商用」

太和八年の詔によると、俸祿制をひくと共に、戸ごとに調三匹・穀二斛九斗をまし、官司の祿となし、また別に預調を均しくして二匹の賦となし、商用を兼ねしめた。魏書食貨志に、

是より先、天下の戸、九品混通するを以つて、戸ごとに帛二匹・絮二斤・絲一斤・粟二十石を調し、又帛一匹二丈を入れ、これを州庫に委せ、以つて調外の費に供す。とあるから、これに加えたわけである。食貨志には、このあとに「是に至り、戸ごとに帛三匹・粟二石九斗を増し、以つて官司の祿となす。後、調外の帛を増し、二匹に滿

たさしむ」とある。通典五食貨賦税上は、この「後」を「復」としている。ここにいう「調外の帛」は本紀の「預調」に當る故、通典に従うべきである。

さて、食貨志の「以九品混通」の「九品」とは、魏書五三李冲傳所載の傅思益の言に「九品差調は、爲すこと日に久し」とあり、また同書食貨志所載の太和十年の三長制施行の詔に「九品の格を建つると雖も、而も豊埒の土いまだ融せず」とある、貧富九通りの分け方であり、そして「九品混通」とは、同書世祖紀上所載の太延元年十二月甲申の詔に、「若し發調あらば、縣宰は郷邑の三老を集め、貨を計り課を定む。多きを哀し寡きを益し、九品混通し、富を縦ち貧を督し、彊きを避け弱きを侵すを得ず」とある「九品混通」と同じであり、要するに富強にも貧弱にも限なく課税し、強者を避け、弱者を侵さないということである。岡崎文夫氏は、この「以九品混通」を「九品を以て混通すれば」と讀み、「九品の差調を平均すれば」と解釋され、一般にはこの讀みが採られている。しかし「混通」には「平均」という意味はなく、もしあったとしても、それなら「混通九品」とあるべきで、この「九品混通」と太延元

年の詔の「九品混通」とは意味が違ふというのは、賛成し難い。また王仲犖氏は、張丘建の算經中に、「今戸を率して絹三匹を出す有り。貧富に依り、九等を以てこれを出さんと欲せば、戸ごとに各々二丈を差除せしむ。今上上三十九戸、上中二十四戸、上下五十七戸、中上三十一戸、中中七十八戸、中下四十三戸、下上二十五戸、下中七十六戸、下一十三戸有り。問う、九等戸は戸ごとに各々まさに絹幾何を出すべきか。答えて曰く、上上戸は戸ごとに絹五匹を出し、上中戸は戸ごとに絹四匹二丈を出し、上下戸は戸ごとに絹四匹を出し、中上戸は戸ごとに絹三匹二丈を出し、中中戸は戸ごとに絹三匹を出し、中下戸は戸ごとに絹二匹二丈を出し、下上戸は戸ごとに絹二匹を出し、下中戸は戸ごとに絹一匹二丈を出し、下下戸は戸ごとに絹一匹を出す」とあるのに注目され、これをもって九品混通の實例とされた。⁽⁹⁾しかし、平均戸調が α 匹、貧富の別が九通りのとき、一品間に定額差調が設定出来るのは、上上戸の戸数を a 戸、上中を b 戸、上下を c 戸、中上を d 戸、中中を e 戸、中下を f 戸、下上を g 戸、下中を h 戸、下下を i 戸とし、定額差調を r とすると、

$$a = \frac{a(a+4r)+b(a+3r)+c(a+2r)+d(a+r)+e+f(a-r)+g(a-2r)+h(a-3r)+i(a-4r)}{a+b+c+d+e+f+g+h+i}$$

$$\therefore a(a+b+c+d+e+f+g+h+i)=(a+b+c+d+e+f+g+h+i)a+r(4a+3b+2c+d-f-2g-3h-4i)$$

$$\therefore r(4a+3b+2c+d-f-2g-3h-4i)=0$$

$$\therefore r=0 \text{ or } 4a+3b+2c+d-f-2g-3h-4i=0$$

であるから、九品間の戸数の割合が、 $4a+3b+2c+d=f+2g+3h+4i$ となる場合だけであり、かつその場合、

r の数は、 $a-i \geq 0$ であれば、何でもよいのであるから

$(a-i) \geq 0$ となると、下下戸の税は、零或はマイナスとなる）、算經の命題は間違っているし、またその例題も特

異例にすぎない。それなら、當時資産の評定にあたり、九

品戸の割合を右のように配分していたかというところ、實際に

はその日暮しの者が大半なのであるから、強いてそのよう

にすると、かえって不合理をまねこう。これは班祿直後の

例であるが、魏書四四薛虎子傳に「小戸は一丁のみ。其の

徴調の費を計るに、終歲乃ち繚あり」とあり、一丁の小戸

でも七匹の調絹（班祿後の調絹は七匹）が課せられている

のをみると、戸調は一律であったとみられる。ただ、先引

の三長制施行の詔文に徴し、田租には何らかの九品差がつけられていたと考えられる。また先述の如く、皇興以後は、租輸三等九品の制が行われていた故、上品戸・下品戸間の實質負擔は、かなり調整されていた。同書食貨志所載の薛欽の言によれば、租車一乘四十斛の輸送費は、近い者で布四十四、遠い者は布八十匹とあるから、京師に納めるのと、州庫に納めるのでは、大變な負擔差である。恐らく九品差調は、このような輸税法や田租（及び雜稅）徴收に際する貧富の考慮、凶作時における下品戸の免稅等により、行われていたのであろう。しかしそれにしても、班祿後の農民の負擔は、實に帛七匹（しかも北魏前尺は晉尺より二寸七厘大きい）・二斤・絲一斤・粟二十二石九斗となり、中國稅制史上類例のない重稅となった。

それならば、何故このような高額な稅になつてしまつたのであろうか。思うに、北魏が中國に侵入した當初は、それぞれの占領地で、前王朝の前秦とか後燕とかが行つていた稅制によつていたのであろう。魏書太祖紀によると、中山を平げた天興元年正月に、「山東の民の租賦の半ばを除く」としているが、これは疑いもなく、後燕の稅制による租を

指しているものである。十六國の税制については、一々具體的なことはわからないが、後趙は戸貲二匹・租二斛（晉書一〇四石勒載記上）、成は男丁穀三斛、女丁がその半ば、戸調は絹數丈・綿數兩にしかすぎず（同書一二一李雄載記）、制度としては、それ程高額なものではなかった。しかしながら、何れも喪亂のあと故、その徴税すら思うにまかせなかった。それ故十六國各國とも、被征服民を盛んに徙民し、彼等を強制労働に附し、その財政を賄って來たのである、北魏もまた漢人や諸種夷民を大規模に徙民し、彼等に計口受田して耕作に當らせたのであるが、その徙民の地位は、極めて劣惡だったのである。そのことは、例えば世祖が赫連昌を討ち、統萬城下の民を徙したとき、多く途上で死し、都に到る者纔かに十の六七であったという話や（魏書世祖紀上始光四年正月の條）、つづいて北涼を討ち、その民を平城に移したが、太延元年二月詔し、「長安及び平涼の民、徙されて京師に在り、其の孤老自存する能わざる者、郷里に還るを聽す」（同書同紀）とした例など、これは明らかに徙民が、恒久的な役に近かったことを示す。彼等の大部分は、被征服者として、半ば不自由民として、強

制労働に服されていたのである。北魏の税收は、實にこれらを中心を集められていたのであり、かく政府の造地で働く徙民の地位が、半自由民であつたことを考えれば、一戸粟二十石・帛二匹・絮二斤・絲一斤の税は、必ずしも重くはなかつたのである。これら計口受田民と屯田民と直ちに同じであつたと言ひ得ないが、當時屯田民は、私牛を持つ者でも五公五民、官牛なら六公四民であり（晉書一〇九慕容皝載記）、一夫の田六十斛が相場であつた（魏書六二李彪傳）。

泰常三年（418）九月甲寅、諸州の民より戸ごとに五十石を出させ、定相冀三州に積ましめ（魏書太宗紀）、延興三年七月には、河南六州の民より戸ごとに絹一匹・綿一斤・租三十石、同年十月には、諸州の戸より五十石を徴している（同書高祖紀上）。これらは何れも臨時の徴税であるが、北魏の税制が計口受田民を對象とした徴税を基礎に、作られて行つたことがわかる。それ故、一般農民はこれに耐えられるものではなく、多くは豪族の蔭附戸となり、遂には三十家・五十家で一戸をなすという状態になつてしまつたのであり（同書食貨志）、それ故にまた、かかる重税

が行われなければならなかったのである。

しかし、これ以上の加税は、もはや不可能である。俸祿制の施行に伴い、その財源として増税が定められたが、俸祿といえは、軍事費につき、財政支出の半ば近くを占めるものである。ここにその解決策として求められたのが均田制であり、三長制であった。均田制とは、舊徒民・計口受田民の地位をひきあげ、無田戸に土地を與えて流民を招安し、これらを自營化しようとしたものであり、三長制とは、豪族下の蔭附戸を析出し、それらに課税することによって、課税の均等化と減税とを實現しようとしたものである。かくして俸祿制を定めた翌太和九年十月に均田制を、翌々年の十年二月に三長制を實施した。だから、班祿に伴う新税が行われたのは、多分八年・九年だけだったであろう。魏書食貨志は、太和十年の三長制施行の記事のすぐあとに、「其の民の調、一夫一婦、帛一匹・粟二石、云々」と記しているが、これは松本善海氏が明らかにされた如く、太和十六年令である。しかし既に、均田制が一夫一婦を對象としたものであれば、税制も太和九年十月より、床を單位に改められたことは、疑いない。

それなら、最後に残された「均預調爲二匹之賦、卽兼用商用」を、どう解釋したらよいのか。預調の「預」は、「あずかる」とか、「あらかじめ」である。魏書食貨志によると、正光(520)の後、國用足らざるを以って、「預め天下六年の租調を折して徴した」とあるから、この預調も、豫め先の年の調をとったものとも解せるが、太和八年の詔に「預調を均しくして二匹の賦となし」とあるから、以前は適宜に取っていたものを定額の賦税としたものであり、また食貨志に「これを州庫に委せ、以って調外の費に供す」とある故、私はこれを、地方官が「あずかる」名目で餘分の調をとり、州庫に貯えたものと解す。次の「兼商用」につき、吉田虎雄氏や韓國磐氏をはじめ、一般にはこれを、のちの公廩錢の如く解している。しかし公廩錢とは、京官及び諸州が、それぞれ元本を置き、それを利廻して公用に充てたもので、これは、それにより民への課税を避けようとしたものである。とするとこの場合は、既に各州が毎年多額な税を定賦として取っているのであるから、更にそれを利貸したとしたら、無茶苦茶という他ない。私はこの詔の根本精神が、勸農抑商であったことからみ

て、これは、その「あずかった」調を、救貧乃至物價調整のため、隨時放出し、兼ねてその利の一部をもって役所の費用にあてていたものと考ええる。

先述の如く、北魏では非常に大量の租粟を州倉に貯えていた。魏書をみると、實にしばしば州倉を開いて賑恤しているが、これはその粟を出していたのである。當時は未だ他に抜本的な民生安定策がなかったため、播種期にあたり、饑饉に際し、貧農の州倉に對する依存度は、極めて高かった。だから、もしそれをしなければ、富豪の乗ずる所となり、貧戸は皆彼等の蔭附戸になってしまふであらう。ここにおいて州倉を充實させ、救荒・民生安定に供そうとしたのが、これであつたと考えられる。

太和十二年、高祖が安民の術を問うたとき、李彪はこれに答え、

宜しく州郡の常調の九分の二を析し、京都度支歳用の餘は、各々官司を立て、年豊なれば倉に糴積し、時儉すれば私の二を加え、これを人に糴さん。此の如くすれば、民必ず力田して以って官絹を買い、また務めて貯財し、以って官粟を取らん。年登れば則ち常に積み、歳凶すれ

ば則ち直ちに給せん。(魏書李彪傳)

といっている。同書食貨志に「高祖覽てこれを善しとし、尋いで施行せり」とあるから、これは明らかに、食貨志所載の太和十六年令(ただし、食貨志は太和十年にかけている)に、

大率十四工調(通典五は、十四中五匹を公調とす、としている。通典に従うべきである)となす。二匹は調外の費となし、三匹は内外百官の俸となす。

とある「調外の費」にあたる。この時には、既に均田制がひかれ、新税法が行われ、それ故租輸九品の制は廢されていたから、州倉には従前のような租粟の貯えがなかったわけであり、それ故に李彪は、改めてこのような獻策をしたのであらう。十六年令では全體の二割であり、八年の場合は一戸あたり二匹であるが、八年の預調を、同じく「調外の費」と呼んでいること、農本抑商を掲げた八年の詔で増額していることから考え、私は、やはりこれも同じような目的で徴されたものと解したい。そしてこれが均田制施行に伴う税制改革のため、一時中止され、のち十二年の李彪の上奏により、再び救荒及び物價調整の資金として全調の

二割を貯えるようになるのであろう。このように解釋して、はじめて「諸々の商人を罷む」と「即いて商用を兼ねしむ」とが、矛盾なく解かれるのではあるまいか。

結びにかえて — 移防から城防へ —

さて私は、俸祿制のことを取上げながら、餘りにも商業貿易のことを語りすぎたかも知れない。勿論、事實はしかく一面的なものではなく、孝文帝時の総合的な華北政策や官僚の増大・機構の整備等々あって、ここに到ったわけであるが、俸祿制施行に關する根本史料の太和八年の詔に、俸祿を支給するのは、「諸々の商人を罷め、以って民事を簡にする」ため、とあるのであるから、やはりこのことが、第一の問題であつたと言わなければならない。「諸々の商人を罷む」ということの裏には、官人の商業高利貸の横行に對する抑制という面があつたことは、見落せない。鮮卑官人にしても、塞上貿易から締出されて以後は、王朝による賜田・賜奴婢を軸に地主化して行く一方、寄生高利貸化して行つた。そしてそれに伴い、百姓・奴婢の反抗もまた次第に高まって來た。このような状態において、それを解

決する道は、官人の商業を禁じ、その壓迫から小民を解放する以外はなかつたのであり、そこに官人に對する班祿の必要が出て來たわけである。

太和八年の詔では、周禮以來の中國の傳統に觸れ、中原喪亂故に班祿でできなかったと言っているが、北魏は異民族の征服王朝であり、直接には秦漢・魏晉の傳統を繼ぐものではなく、その初めは、全く異質な遊牧部族連合であり、その社會を支配した原理も、また別なものであつたのである。それが中原に入り、次第に漢人王朝としての性格を増すにつれ、魏晉の傳統を繼ぐものとしての方向を取り始めたのであり、それを導いたのは、漢人名族の崔浩らであつた。浩は事を急ぎ、結局は一族門誅されたが、八年の詔も、またかかる漢人儒者によつて書かれたものである。そのことを考えれば、班祿以前の北魏社會について、理解が缺けていたのは、不思議ではなく、またこの詔を含め、北魏の史書全體が、商人に對し、侮視感を以つて書かれてゐるのも、そのためだったのである。

俸祿制の施行は、均田制・三長制の實施をもつて、はじめて改革の意義を實現する。あとの二制をぬきにしては、

實施不可能である。俸祿制により、官吏の小民誅求を防ぎ、均田制により、農民の生活を安定させ、三長制により、税役の負擔を公平化し、ここに文明太后による一連の改革が完成する。

だが、このように着々と中國支配を完成させて行つた時、破綻は思わぬ所に現われた。というのは、しかく統一を完成、貿易を獨占化して行くに伴い、塞上貿易は衰退、かつてそこで遊牧及び交易に活躍していた鮮卑諸部は、次第にその生活の場を失つて行つた。北魏は、北方防備のため塞上に鎮を置いたが、そこに残された鮮卑部族は、完全に無視された。あまつさえ肅宗朝(515-28)には、鎮人の城を出て浮遊する者は、逃亡罪に處すといふれまで出た(魏書一八元深傳)。このような中央における重農抑商策・遊牧生活者を無視した政策は、塞上に残された人々の生活を窮乏に追いやったのであるまいか。高祖の延興五年四月には鴈鵠を飼うことを禁じ、六月庚午には牛馬を殺すことを禁じ、肅宗熙平元年(516)七月庚午、重ねて殺牛の禁を出している(同書九肅宗紀)。このようなことで、どうして草原に残された者達の生活が成立つてであらうか。特

に移動を禁じられ、商業をとめられては、鎮人達の生活の場がなくなる。そこで彼等は、ただ立地條件の悪い屯田を耕作し、或は城内にいて中央からの軍糧補給に頼つて生きるより他なくなる。しかもそれすら途絶えがちとなる。

肅宗の正光五年、突如沃野鎮人破六韓拔陵が叛し、それをきっかけに塞上諸鎮がつぎつぎに叛し、遂に北魏は大混亂に墜つて亡びて行くのであるが、このような爆發的反亂をよんだのは、かく追詰められた塞上の人々の、せつば詰つた動きに他ならない。この六鎮の亂の原因については、六鎮兵士の質の惡化・高祖の氏族分定以後の塞外舊魏族の身分的疏外等々種々あげられるが、私は他の諸々の理由よりも、むしろ、かつての自由な遊牧生活と、またうま味の多い塞上貿易を禁じられ、城内に押込められて行つた遊牧民の不滿の爆發であると思う。

破五韓拔陵の亂に際し、北道大都督に任ぜられた元深は、これが諸鎮の大反亂を招くであろうことを警告、その原因につき「昔皇始(386)は移防を以つて重と爲せり。……今は鎮人浮遊して外に在れば、皆流兵のこれを捉うことを聽す」といい、移防を禁じたことをあげている(魏書

元深傳)。移防とは、塞上にて遊牧し、交易に従いつつ防衛する騎馬民族本来の戦闘體制である。この移防をやめたのが何時からかと言うに、これは高祖の班祿直後、高閭の獻策による。彼は六鎮の北に長城を築き、鎮兵を常駐させるべきであると上奏、「遊防の苦を罷」めんと言っている(同書五四高閭傳)。これは正しくこの時期における中央の重農策と一連の繋がりを持つ、漢人的發想である。

要するに、太和八年を境に、商業に對する價值感が一變してしまつたのであり、かくしてその生活の原理を否定された塞上遊牧民の不滿が、遂に北魏を滅亡に追いつたのである。(一九六五・八・一〇日稿)

註

- (1) これについての私の考えは、「北魏三長攷」(東方學三一輯、一九六五年)に述べてある。
- (2) 福島繁次郎「北魏孝文帝の考課と俸祿制(第一期)」(滋賀大學學藝學部紀要一二冊、一九六二年)。
- (3) 東洋史研究一二卷五號、一九五三年。
- (4) 馬長壽『烏桓與鮮卑』(一九六二年)二七四―八二頁。
- (5) 「北魏末に於ける支那國內市場の成立過程」(歴史教育六卷七號、一九三一年)。
- (6) 松田壽男氏は、遊牧國家の發展には、中繼貿易が不可缺であることを強調されている(松田壽男『漠北と南海』一九四二

年、六三―九頁)。

- (7) 始祖―太祖間の歴史については、田村實造氏の「代國時代のタクバツ政權」(東方學一〇輯、一九五五年)を参照されたい。
- (8) 今西錦司『遊牧論そのほか』(一九四八年)七〇―二頁。
- (9) もっとも、今西氏は、遊牧民の移動は、羊の習性によるもので、草のよしあしによって決るものでない、と言っておられる。しかし遊牧は、去勢とか群れ分けとか、有効な羊の管理技術をもって成立つものであり、唯だ單に、羊の群れのあとを人間がついて歩くようなものではない。牧草に恵まれ、しかも人間の方に固定生活を必要とする事情があれば、むやみに移動はしない。蒙古の遊牧については、後藤富男氏の『モンゴル游牧社會の研究』(一九六三年)を参照されたい。
- (10) 二人が西使した年代及び西域諸國については、松田壽男『古代天山の歴史地理學的研究』(一九五六)一七三―二〇四頁を参照されたい。
- (11) 氏は、佛教が「五明」の一つとして「工巧」を重視していること、及び六朝時に、商人が經文の中で大切な働きをする「提謂波利經」という經文が作られたことを、あげておられる(歴史學研究會・京都地區歴史部門研究連絡協議會編「一九六四年、北京科學シンポジウム歴史部門參加論文集」所收、「東アジアにおける諸國家、諸民族の歴史的諸關係の形成と發展」。提謂波利經については、塚本善隆「支那の在家佛教特に庶民佛教の一經典」(『支那佛教史研究、北魏篇』一九四二年、所收)参照。
- (12) 「魏晉南北朝を通じ北支那に於ける田土問題綱要」(支那學

六卷三號、一九三三年、岡崎文夫『南北朝に於ける社會經濟制度』一九三五年、所收。

- (13) 「北魏初期社會性質與拓跋宏的均田」(中國歷代土地制度問題討論集)一九五六年、所收。

(14) しかも、張丘建の算經は、堀敏一氏が指摘された如く、北齊以後のものとみられる(「北朝の均田法規をめぐる諸問題」『東洋文化研究所紀要二八冊、一九六二年、一二〇頁、註3)。

(15) 晉にも貧富九品の別があったが、晉武帝の戸調式によると、有品官人の占田額は、官品第一が五十頃、以下五頃遞減で、第九品でも十頃であるから、これにより貧富の九品を考えると、大方の庶民は下品戸であつたであらう。ただし、敦煌出土の西魏の戸籍・計帳をみると、上中下三等で、中戸の数が多く、上戸よりは下戸の方が多く(池田溫「均田制——六世紀中葉における均田制をめぐって——」古代史講座8、一九六三年、所收)、またその租額に格差があるが(西村元佑「西魏計帳戸籍における課と税の意義(上)」東洋史研究二〇卷一號、一九六一年)、勿論定額差ではない。因みに、唐は貧富九等であるが、敦煌等出土の唐代の戸をみると、籍を一郷のうち、下等戸が壓倒的に多い。

- (16) 吳承洛『中國度量衡史』(一九五七年)。

(17) 徙民の身分については、堀敏一氏の最近の勞作「均田制の成立(上)」(東洋史研究二四卷一號、一九六五年)を参照された。

- (18) 「北魏における均田・三長兩制の制定をめぐる諸問題」(東

洋文化研究所紀要一〇冊、一九五六年)。

(19) 魏書食貨志は、もと一匹二丈であつたとしているが、預調という呼び方からいっても、太和八年の詔に徴しても、以前には、きめられた額はなかつたと思う。

(20) 吉田虎雄『魏晉南北朝租税の研究』(一九三三年)七七—八〇頁。

(21) 韓國磐『北朝經濟試探』(一九五八年)八五頁、註三。

(22) 因みに、北魏が常平倉を置いたのは、高祖の太和二十年十二月戊辰である(魏書七下高祖紀下)。

(23) 谷川道雄氏は、北魏末の反亂が、ほとんど城民・鎮人と呼ばれる者によつて起されているのに注目され、鎮人・城人・城民とは、鮮卑王朝が占領地支配・北邊防備のため、華北平原より北邊一帯に配備した、一般州郡民と異なる軍人であつたが、華化政策の進行に伴い、中央から疏外され、府戸とよばれる庶民以下の身分におちいり、遂に彼等の不満が爆發、六鎮の亂となるに到つたのであるといわれている(「北魏末の内亂と城民」史林四一卷三號・五號、一九五八年)。城民の身分については、谷霽光「城民與世兵」(『府兵制度考釋』一九六二年、所收)参照。

(24) 岡崎文夫『魏晉南北朝通史』(一九三五年)三八四—五頁。

谷川、前掲論文。唐長孺・黃惠賢「試論魏末北鎮鎮民暴動的性質」(歷史研究、一九六四年一期)。

(25) 流兵とは、流刑兵のこと。谷川、前掲論文参照。